

北周・武帝期の庾信（三）

——北斉との本格的な武力衝突へ（保定三・四年）——

加藤 國安

（漢文学研究室）

はじめに

私はこれまで、北周の孝閔帝・明帝、そして武帝の保定元―三年頃における庾信の事跡とその作品について、北周の政治史の流れの中に位置づけながら、そこで庾信がどのような活動をしてきたかを論述してきた。この間の北周朝は、小さな地域での紛争はともかくも、本格的な対外戦争を行ってこなかった。それは国内の諸条件が揃わなかったということが大きき背景として上げられるが、政治的・経済的な基盤が整い始め、南の陳朝ともようやく良好な関係がでさ上がるや、北周朝内には、腐敗しきった北斉併呑への壮大な野心が次第に湧き起こってくるようになる。まずは猛将・楊忠が動きだし、そして最高実力者・宇文護もこの東伐に乗り出す事態へと、北周朝の政治は大きなうねりをみせていく。北周対北斉の長い断続的攻防戦の始まりだった。

庾信もおのずからそうした荒波に呑み込まれ、北周軍の一員として自身も何度か従軍しているし、またこの戦争に関わった北周の頭貴らのた

めに、その墓碑銘を執筆するまでになっていく。この時期、ともに厳しい苦難を耐える中で、同士としての感情も生まれ、北周人頭貴との間にも人間関係が徐々に密になっていったと考えられる。そして、次の天和年間以後の旺盛な制作活動に入っていくのだが、この保定年間の中頃というのは、北周にとっても庾信にとっても、重要な転換期となったように思われる。が、この時期に関する理解もまた、従来空白部分となっている。小論では、そうした北周人庾信の幅広い活動の基を形成したと考えられる、当時の北周の外交史の流れを中心に把握してみたい。また宇文護の北周朝内における政治的地位の変化についても、これまた未だ解明されてはいない。この点に関しても、庾信の北周内での立場と深く関わりをもっているのので、資料を細かく読解しつつ併せて言及してみたと思う。

一 北斉との武力対決への気運

この章では、保定年間、北周と北斉の間で武力衝突が生まれるまでの

過程について、見てみることにしよう。北周王朝になって以降、北斉と交戦したのは、史料から見るかぎり孝閔帝の時に、宇文護の命により大司寇・達奚武と小宗伯・楊忠が軍を進めたのが最初である。¹⁾が、この時は北斉軍の侵攻や、北斉の將・司馬消難の亡命が契機であって、北周側の強い政治的戦略に発するものではなかった。この折見せた、楊忠の決死の突撃も印象的である。「進んで死する有るも、退きて生くること無し」と覚悟を決め、ただ独り千騎を率いて夜の城下に侵入したり、また追手が迫ってきた時にも、「但だ飽食せよ。今、死地に在り」と將兵らを叱咤したりしている。そして、ついに北斉軍をかわし無事に大任を果たし凱旋するのだが、その猛将ぶりに、さすがの達奚武も舌を巻き、「ワシも天下の暴れん坊じゃが、今日はそちに負けた」と感嘆したという。「髯髯美しく、身長は七尺八寸、状貌は瓌偉、武芸は絶倫、識量は沈深、將帥の略（＝戰略）有り」（以上『周書』楊忠伝）と記される、この楊忠こそ隋の高祖・楊堅の皇考、すなわち父その人である。こうした大功によって明帝期には隨国公となり、北周朝内に勢力を伸ばしているのである。

やがて、武帝の保定二（五六二）年。月は不明だが、「時に、朝廷において突厥と連合して北斉を伐つことを議論した」とある。その折、公卿らはみなこう言った。

「北斉の国土は、天下の半分を占め、国家も裕福で軍勢力も強大だ。もし北方の側から并州入りを敢行すれば、極めて險阻な所を通過せねばならないし、おまけに大將・斛律明月も簡單には崩せぬぞ。今、敵の本拠地を突こうとすれば、十万の兵がなければ無理じゃ。」

ただ楊忠だけが、こう発言した。

「軍の勝利はその団結力にあるのであって、その多さではない。一

万騎あれば、十分だ。明月なんぞ、子わっばさ。何ができるといふんだ。」

（以上『周書』卷19 楊忠伝）

保定二年十月。庾信の詩に描かれたように、少陵原で軍事演習が行われた。十二月、北斉への攻撃があったかどうかは、既述のように史料上の混乱があつて、よくは分からない。翌、保定三年九月。いよいよ「大軍、東伐」（『周書』達奚武伝）の時がくる。東伐までいささか時間がかったのは、いろいろと準備が必要だったこともあるが、よく史書を調べてみると、保定三年正月早々から朝廷が奇妙な事件に振り回されているという、そういう時間のロスも一因としてあつたのではないか。宇文護にまつわる妙な風評が飛び交い、ある事件が持ち上がった。

保定三年、（侯莫陳）崇、高祖（＝武帝）に従い、原州（＝寧夏自治区固原市）に幸す。高祖、夜に京師に還る。（侯莫陳崇は）竊かに其の故を怪しむ。崇、親しむ所の人たる常昇に謂いて曰わく、「吾、昔卜筮者の言うを聞く、『晋公、今年利あらず』と。車駕、今忽ち夜に還る。是れ晋公の死すに過ぎざるのみ」と。是に於いて衆、皆之を伝う。或ひと其の事を発す有り。高祖、諸公卿を大德殿に召して、崇を責む。崇、惶れ恐れて謝罪す。其の夜、（宇文）護は將兵を遣使して崇の宅に就（＝赴）き、逼りて自殺せしむ。

（『周書』卷16 侯莫陳崇伝）

すなわち、太保・侯莫陳崇が宇文護について昔聞いた卜筮者の予言を流し、今年あたり死ぬだろう、と不吉なことを口にしたのだ。侯莫陳崇といえ、西魏以来の名將で、かの六官の開始と同時に大司空を拝し、

また北周・孝閔帝の即位以来、太保、大宗伯、大司徒を歴任し、李弼・于勤らとともに「朝政に参議」（『周書』于勤伝）するような、まさに最高幹部の一人である。それがこのような血迷ったような妖言を流すとは、じつに信じがたいことではある。

これについて、『周書』武帝本紀には、「（保定）三年春、…乙酉、太保・梁国公の侯莫陳崇に死を賜う」と記すのみで、これ以上の詳細を伝えていない。ただこれは侯莫陳崇という大物の言動だったことからいって、北周朝の中樞部に依然として宇文護への反発勢力が浮沈していることを露呈したものと思われる。この事件に対する宇文護の心情については、何も記録がないが、自らの人望のなさへの慨嘆を推測するのはそう難しいことではあるまい。こんな辺りから徐々に、宇文護の権勢に翳りが生じ始めてくるのである。この奇妙な事件の顛末も、北周軍の東伐のタイミングに、微妙な影響を投げかけていたのではないか。

もっとも、北周の北斉討伐が遅れたのには、もっと大きな理由があった。史料に、「帝は、（陸）騰の母の齊に在るを以て、未だ東討せしめず」（同 卷28 陸騰伝）と記されるように、北周の重臣の肉親が、かの地になお残留せしめられていたのだった。この記録は、北周の東伐の時期に関する貴重な一文である。そして、何よりも宇文護自身の母がなお北斉に留め置かれていたのである。これについては第三章で後述することにして、ここでは言及しないでおく。

しかし全般的にみて、保定三年は、北周にとってますます国力を充実させた年だったといえる。まず、二月、司憲大夫・李和、拓跋迪の二人によるかなり厳密な「新律」が完成している。この「新律」により、新しい刑法が施行されていくことになるが、ただし、「異志を有」つていた宇文護は、この「苛密」すぎる法を緩やかに運用することで人心を得ようとし、また「子弟や属僚は、皆竊かに其の権を弄び、百姓ら愁い怨

むも、控告するに所無し」（『隋書』刑法志）といった状況も、現にあってことは知っておかねばならない。

四月には、「初めて天下に（復）讐を禁ず。犯した者には、殺人をもつて論」（以上『周書』武帝本紀）じたという。この報復禁止令は、北周国内で怨恨を暴力的に解決するのを禁じたもので、北周人同士は無論のこと、旧梁民らの北周朝に対する怨恨をも一掃し、彼らとの精神的融和をいっそうはかりたいとの政治的意図が含まれていたと考えられる。ちなみに、保定五年六月には、詔により「江陵人で年齢六十五歳以上の官奴は、放免せよ」という決定が出された。いわば、旧梁民の高齢者奴隸解放宣言である。北斉との決戦が緊迫感を増す中、挙国一致の体制造りが急がれたのだろう。旧梁民の北周朝高官への優遇政策とともに、この奴隸解放政策もまた、彼らの北周朝への怨嗟を確実に溶かしていく、大きな役割を担ったと考えられる。

保定三年四月にかえろう。武帝は太学に幸し、老元勳・于勤を三老となし道を問われた。『礼記』『楽記』に倣った儀典だが、この時の若年皇帝・武帝（二一歳）の振舞いは、それまでのように宇文護の影に隠れるような、薄い存在感というのとは全く違っていた。武帝はその天賦の龍質をいかんなく發揮、見事な威厳でその場を圧倒したのだった。その時の模様を、史書はこう記す。かなり長いが、全文を掲げる。

三老が門に入るや、皇帝おん自らお迎えになり、門の間で拜礼された。これに対し、三老も答礼を返した。役人が三老の席を中柱の所に設け、座を南に向かつて用意した。太師・宇文護が階段を昇り、座を設けた。三老も席に昇り、南面して几に依つて着席し、師の道にかなった振る舞いでおられた。大司寇（司法長官）・楚国公・豆盧寧が階段を昇り靴をきちんと直した。そして皇帝が階段を昇ら

れ、斧を縫い取った屏風の前に立ち、西に面して着席された。役人がお膳を勧めると、皇帝がひざまずき醬豆を添えられ、おん自ら肌脱ぎし性を割かれた。それを三老は食べおえると、皇帝はまた親しくひざまずかれ、爵を授けると酒を少し含まれた。役人が（酒を？あるいは水を？）撒き終わった。皇帝は北面して立たれ、三老の方へ歩まれた。三老は起立し座席の後ろに立った。

皇帝が話された、

「朕はみだりに天下の重任を担い、我ながら不才にして、政治の根本を知らぬ。公よ、それを朕に語り聞かせよ。」

三老が答えていった、

「木は繩を受ければ、まっすぐになるものでござります。天子は諫言にお従いになられれば、聖人になれるものでござります。いにしえの世より明王・聖主たるもの、みな謙虚に諫言をお入れになりました。さすれば、得失の何たるかがお分かりになり、天下は安泰となるのでござります。陛下におかれましては、ただただこの事をよくお考え下さいますように。」

またいった、

「国家の基をなすのは、忠信にござります。だからこそ、昔の人は、たとい食べ物がなくとも、武器・兵士がなくても、信義だけは失してはならぬと言ったのでござります。まさに国家の興廢というもの、これにかかっておるのでござります。どうか陛下、願わくばこの点を大切に堅持されて、決して失することのなきように。」

またいった、

「国家を治める道は、必ずや法にあるものでござります。法とは、国家の綱紀のことです。綱紀は、正さねばなりません。そのカギ

は、賞罰にござります。功績ある者には、必ずや恩賞を賜り、罪ある者には必ず罰を課さなければなりません。さすれば、善行は日々に増え、悪事は日々に収まっていきます。もし功績があつても恩賞を与えず、罪業があつても罰しなければ、天下は善悪の区別を分からなくなり、下々の民は手足の置き場もなくなつてしまひましよう。」

またいった、

「言行は、身を立てる基本にござります。言葉が出て、行いもそれに従うこと、誠にこのようであられることを願っております。願わくば、陛下。どうか三たびお考えになってから話され、九たび思慮されてから行動して下さいませう。もし思慮を欠かれますならば、必ずや過失を招かれましよう。天子の過失は、大小に問わず、日食・月食と同じように知らぬ者としておりませう。どうか陛下、願わくば慎重になさって下さりませ。」

三老が言い終えると、皇帝は再拜して応じられた。三老も答礼して拜された。儀礼は終わり退席された。

（『周書』卷15 于謹伝）

「新律」の完成に加えて、この三老・于勤の進講は、武帝の威厳を高める上で少なからず意味をもつただろう。前稿で見たように、武帝は元来沈着冷静な司祭のごとき性格の持ち主だったから、このような儀式はまさに武帝その人の長所を引き出す効果を自ずからもつたと考えられる。一方、こうした皇帝中心の典礼は、宇文護にとつては、自身の政治的存在感を希薄化する作用を果たしたといわねばならない。先の侯莫陳崇の妖言事件に続いて、こうした一連の小さな政治の流れに対する鬱積が、翌年の保定四年十月の「洛陽の役」の中途半端な決断に見られるよ

うに、宇文護をして大功を狙つての曖昧な賭けへと促していったのだと考えられる。

「洛陽の役」については、今はおいておくとして、北周朝の官僚の目から見れば、武治路線と並行して、このような儀礼をも重んずる武帝のバランス感覚の取れた政治手法に、急進的文治路線派だった明帝に比べ、より堅実かつ現実的な政治センスを感じていただろう。それは、庾信ら旧梁臣にとつてもおそらく同様だったはずで、武帝の政治体制にある種の信頼感のようなものが、徐々にではあるが醸成されるようになっていったと考えられる。

かくて年が明け、翌保定四年三月。北周の官僚は古代以来の礼に立脚した、官僚としての古い慣例を採用することとなった。それは、「初めて百官をして笏を執らしむ」（『周書』武帝本紀、『隋書』礼儀六も、ほぼ同様の表現）というように、束帯の時には古式ゆかしく、手に笏という手板を執るといふ儀礼だった。統一国家をめざす北周朝の基盤整備は、いよいよ現実味を帯びつつ着実に進み出したのだった。この頃の北周朝の隆盛ぶりについて、史書は「保定三年、盛んに宮室を営む。…時に豪富の家、競いて奢麗を為す」（『周書』卷47 黎景熙伝）と記し、当時北周朝が経済的にも充実の様相を呈していたことを伝えている。

二 随国公・楊忠の北斉討伐

こうした経済力の隆盛や政治的新興の気運を背景に、いよいよ北周軍が動き出した。保定三年九月のことである。全軍が整い、大司空楊忠を元帥として、これに大將軍の楊纂、李穆、王傑、爾朱敏、および開府の元寿、田弘、慕容延等十余人がつき従つての総勢一万騎が、突厥軍とともに北斉の討伐に出陣した（『周書』武帝本紀と楊忠伝より）。この

時の総司令官は楊忠で、宇文護自身はまだ出陣はしていなかった。この楊忠の北斉討伐については、これまで詳しい報告がなかったと思われる。そこで小論では、各資料をできるかぎりかき集めて、その様子を復元してみることとする。

十月。楊忠、第二首都同州に到着。太保・鄭国公の達奚武も三万騎を率いて平陽より出て、南道（一東道ともいう、『周書』達奚武伝）を通じて晋陽で楊忠軍との合流を期した。楊忠は西魏北周朝の中樞をなす人々の発祥の地、武川ぶせんに到着。ここには、若き頃この司馬の官に就いていた関係で、楊忠の旧居があった。その故宅をよぎり、先人を祭つた後、いよいよ出発。そして南下を開始し、北斉軍の守る陘嶺を奇襲攻撃で大破。意気上がるところへ、突厥史上の隆盛期の英雄、木杆可汗もつかん侯斤の率いる突厥軍十万騎の強力な支援部隊がやって来たのだった（『周書』武帝本紀、楊忠伝、突厥伝）。

この時、楊忠に従事した主な者——楊纂、李穆、王傑、田弘——の記録は、次の通りである。

- 「〔保定〕三年、随公・楊忠に従い東伐し、并州に至り還る。」
（『周書』卷36 楊纂伝）
- 「〔保定〕三年、随公・楊忠に従い東伐し、并州に至り還る。」
（『周書』卷30 李穆伝）
- 「〔保定〕三年、傑に詔ありて、随公・楊忠と与に北より斉を伐ち、并州に至りて還る。」
（『周書』卷29 王傑伝）
- 「〔保定〕三年、随公・楊忠に従い、斉を伐つ」
（『周書』卷27 田弘伝）

この他に、尉遲運（大司空・尉遲綱の子）も、「〔保定〕三年、楊忠

に従い齊の并州を攻む」(『周書』卷40 尉遲運伝)、賀若敦「(保定)三年、柱國楊忠、突厥を引き齊の長城を破り、并州に至り還る」(『同』卷28 賀若敦伝)等と、いずれもごく簡単に録される。

また保定三年、汾州刺史となった韓褒は、国境を接する北齊と交戦状態に入り、敵の目を巧妙に欺く戦法で活躍した。史料には、かなり詳しくこう記されている。

汾州の国境線は、太原と接し、千里徑(地名)に当たっていた。

以前より、北齊の侵略が度々あり、汾州の民は農耕ができずにいた。これまで相次いで着任した刺史は、この北齊の侵攻をどうしても防ぎきれなかった。韓褒が着任すると、まさにその北齊の侵略に直面。しかし、韓褒は県内に命を出さなかった。人々は何の用意も出来なかったから、多くのものが略奪されてしまった。北齊人は互いに喜び、「汾州は、オレ達が行っても、気づいていない。先ず何よりも、兵を集めていないのだから、今ならば、兵を往還させても、全然オレ達を追走できないな」と言い合った。これより油断し怠けるようになり、陣営もきちんと管理しない有り様だった。しかし、韓褒は密かに精鋭部隊を率い、北の山中に潜伏させ、險阻な所に分けて待機させ、その帰路を迎え討つ策に出たのだ。彼らのスキに乗じ存分に伏撃し、全員を捕らえた。そして、京師に護送し、上奏し、「捕まえた賊徒は多数でございますが、多とするほどのものではござりません。捕虜として辱めても、ただ益々恨みを増させるだけにござります。この際、全員を釈放いたし、徳をもって怨に報いたいと存じ上げ奉ります」と述べた。詔があり、これを許した。

(『周書』卷37 韓褒伝)

年が改まり、保定四年。自軍の勝利を確信し、北齊討伐の熱き願いに燃える楊忠は、さらに北齊の領内奥深くへと軍隊を進めていく。『周書』武帝本紀には、「春正月庚申、楊忠は齊の長城を破り、晋陽に至り還る」と、ごく概略のみ記される。しかし、この時の戦いは、楊忠の盛んな意気をあざ笑うかのように、まさに死闘といえるものになった。『同』楊忠伝は、さらに詳細に次のように記す。

この時、大雪が数十日も続いた。冷たい風が過酷を極めた。北齊軍は楊忠軍の精鋭さを熟知していたから、太鼓を激しく打ち鳴らしながら出撃してきた。これを見て、突厥軍の方が震え上がり、部隊を引き上げ西山に登って全然動こうとしなかった。全軍は色を失っていた。そこで楊忠は全軍に檄を飛ばした。「事の勢いは天にこそあるのだ。兵の多い少ないにはないぞ」と。そこで七百人を率いて(雪の中を)歩いて戦った。死者が、四五割出た。達奚武の軍勢三万が後で支援に駆けつけてくれることを期したが、来なかったので、楊忠は諦めて軍を分けて撤退させた。北齊軍は、それ以上は追撃してこなかった。

(惨敗の反動として)突厥軍は、無秩序な略奪行為に走った。晋陽よりさらに平城七百余里に侵入、人畜ともども一つとして残すところなく、捕虜にするか斬殺するかしたが、その数たるやおびただしかった。武帝は使者をつかわし、楊忠を夏州に迎え労をねぎらった。都・長安に帰還するや、手厚い恩賜・酒宴を行い、楊忠を太傅となした。一方、宇文護は楊忠が自分に付かないのを気に入らなかつた。

(『周書』卷19 楊忠伝)

この時の楊忠軍の侵攻を、北斉側から見るとどうだったのか。急変を聞いて武成帝は、「鄴より道を倍して兼行し救いに赴くも：時事は既に倉卒（Ⅱにわかな様）にして、兵馬未だ整わず。世祖（Ⅱ武成帝）此くの如きを見て、亦た之を避けて東せんと欲」『北斉書』段韶伝）したが、族臣の請いを納れて、趙郡王叡と段韶に後事を託した。また本紀にも、こういう。

河清二年（Ⅱ北周の保定三年に当たる）：冬十二月：己酉、周將・楊忠は突厥の阿史那木汗ら二十余万人を帥いて、恒州自ら軍を分かつて三つの道を進軍、吏人らを殺害した。この時、大雨と大雪が月を連ねて降り、南北千余里の平地は、昼なのに霜が数尺も下りたほどだった。：己未、周の軍隊が并州に逼り、また大將軍達奚武の率いる数万の軍勢が、東雍および晋州に至り、突厥軍と呼応していた。……

三年（保定四年に当たる）春正月庚申の朔、周の軍隊は城下にまで至り陣を敷き、城の西方で戦った。周軍および突厥連合軍は大敗を喫し、人馬ともに枕を並べて討死。その遺骸は数百里も途切れることはなかった。

『北斉書』武成本紀

また雪の中の戦闘については、こう記される。

（段）韶はいった、「歩兵の気力にはおのずから限界がある。今はかなり積雪があつて、逆に戦いには不利なるぞ。陣をしいて待つに及ばぬわ。敵は疲れ、わが方は安逸じゃ。敵を破るは、必定よ。」

いざ、交戦となると、これを大破したのだった。敵の前鋒軍はことごとく倒れ、一人も余すところがなかった。その他の者は、夜通しかけて逃走していった。

『北斉書』卷16 段韶伝

「大敗を喫した」「大破した」と記されるから、楊忠軍はほうほうの体で逃げ帰ったことが想像される。北周・突厥の大連合軍の前に、北斉側が必死の反撃を行ったこともあるが、北斉の軍事力は想像以上のものだったのである。

また達奚武軍の方だが、平陽に到着してみると、楊忠軍はとうに撤退したあとだった。これは、達奚武の軍勢三万が、晋陽で楊忠軍と合流する約束に遅れたためだった。北斉の総大将・斛律光（字、明月）は達奚武に書を残し、「オオトリはすでに大空に飛び去って、あとには網にかかったザコだけが沢の辺りに見えるだけ」と記した。北斉軍の主力もすでに引き上げたあとだった。その書を見て、達奚武もやむなく軍を帰すのである（『周書』達奚武伝、および楊忠伝）。

この達奚武軍の撤退についても、北斉側から見ると、いささか違った表現となっている。

（河清）三年正月、周は將軍達奚武（字は成興）らをして平陽を侵攻させた。そこで北斉は斛律光（Ⅱ斛律金の子）に詔して、歩兵・騎兵三万をして防御に当たさせた。達奚武らはこれを聞いて退走した。斛律光は北に逐い、国境線を越えて追撃し、二千余人を捕らえて帰還した。

『北斉書』卷17 斛律光伝

と、じつは斛律光の部隊を恐れての退走だったと記されている。この間の違いの理由は全く分からないが、達奚武軍がなんらの活躍もないままに北周に帰還したことだけは、紛れもない事実といえる。

では、北周と連合軍を組み、第一次北斉討伐を決行した突厥側は、今回の戦いをどう見ていただろう。

保定三年、随公楊忠に詔が下り、軍勢一万を率いて、突厥軍と連合して北斉を討った。楊忠軍が陜嶺を越えた頃、(突厥の将) 俟斤が騎兵十万を率いて合流した。そのあくる年正月、北斉の君主を晋陽に攻撃したが勝てなかった。(その腹いせで) 突厥の俟斤は兵を暴走させ、略奪の限りを尽くして帰還した。楊忠は武帝にいった、

「突厥は兵士も武器もダメなくせに、恩賞はやたら軽い。ボスは多いが、法令がない。これでは統御しにくいなんてものではございません。；朝廷は彼らの虚言を真に受け、將兵どももその威風を恐れ一目おいておりますが、ヤツらの態度なんてごまかしそのもの、ただ相手にしやすいうにすぎませぬ。今、臣めが見まするに、人をやって前後して斬り捨てる方がよろしかと存じます。」

武帝は、聞き入れなかった。

〔周書〕卷50 異域

と、楊忠が、今回の惨敗の責任を突厥の無能のせいだと決めつける場面が描かれている。この記述によると、敵を目前にして突厥は畏れをなして全く動けなかったようだ。また惨敗後の、欲望に駆られての無軌道もあって、楊忠はこういうだらしない連中をよほど腹にすえかねたのだろう。斬って捨てるべしと、吐き捨てるように言い放っている。が、武

帝も突厥との同盟を重視していたし、お后が突厥王の娘だったこともあって、無論まともに聞き入れるはずはなかった。猛將・楊忠も、これは怒りの余りの妄言であって、むろん本気ではなかっただろう。ともかく楊忠は、この惨敗で意気阻喪する気配など微塵もなかった。むしろその雪辱に燃えて、次の機会のを窺っていたのである。

この閼將のすさまじい気迫に圧倒されてか、最高実力者の宇文護はどうも楊忠と齒軍が噛み合わず、扱いにくいヤツという印象だった(『周書』楊忠伝)。今次の戦いを通して、宇文護はもともと器量の小さい人物だったから、政治が目まぐるしく動きたし、おおぜいの將軍や官僚らを束ねなければならぬ事態に直面するや、統治能力を発揮できなくなりかけていた。まだはつきり目に見えるほどではなかったが、臣下の心はどこも朝の政治は気がつくつと、いつの間にかこの若年皇帝をもう一つの軸として、展開する様相を呈し始めていたといえる。この楊忠の北斉討伐を契機に、北周の政治が大きく転換する芽が、ここに生まれることとなるのである。

これらの三種の史料を総合すると、大体以上のような様子が復元できる。悪天候という不慮の要因もあったが、保定二年、朝廷において北斉討伐の議論をした折に、諸公卿らが危惧したように、北斉はそう簡単に下せるような相手ではなかったのである。

保定四年五月、突厥が貢物を献じてきた。先の大敗北の謝罪という意味も込められていただろう。この月、北周朝は政治の機構改革にも随時着手、礼部を司宗、大司礼を礼部、大司案を案部とした。保定四年八月、楊忠はその突厥と、再び東伐へ向けて動き、「北河まで至って還った」(『周書』武帝本紀)。この時の記録は、なぜか楊忠伝にも北斉・武成本紀に

も突厥伝にも記載がない。

北周が東伐に全力を傾注し出すようになったため、西方はいきおい手薄になってしまった。これを警戒した北周は、保定四年(何月かは不明)、河西郡公・李賢を派遣、西方の守りに就かせた。この李賢なる人物は、武帝と齊王憲が赤ん坊だった時に、宮中で害に遭うのを避けるため、原州(今の寧夏回族自治区回原県)の自分の家に預かって育てた、育ての親である。また例の宇文護排斥事件を起こし、処刑された熱血漢・李植の父李遠(李遠もまた、宇文護に迫られて自殺させられている)の兄でもあった。李賢は、その時連座して除名されたが、保定二年、詔により官爵を復活されていた。史料には、

(保定)四年(何月かは不明)、国軍が東伐に向かった。朝議で、西方が手薄になり、羌や渾の侵略が懸念されるとの話になった。そこで、李賢に使持節・河州総管・三州七防諸軍事、河州刺史を授け、(その任に当たらせ)ることとした。河州は本来総管ではなかったが、この際新設することとしたのである。李賢は早速屯田を開始、また交通・運輸にも心を配り、情報収集の特務員を多く設置、その侵攻に備えた。ために羌や渾はその野望を引込め、敢えて東進しようとしなかった。

『周書』卷29 李賢伝

とある。

武帝の李賢夫妻への信任は甚だ厚かった。一九八三年、寧夏回族自治区回原県にある、この李賢夫妻の墓が発掘され、中からササン朝バクトリア製の銀製水瓶を発見、話題を集めた。この水瓶の入手経路は分からないが、西方防衛の総指揮官にふさわしい物ではある。武帝は、この育

ての親に十分な礼を尽くしたのだった。

三 宇文護の母と庾信の母

保定四(五六四)年九月。ようやく宇文護の生みの母の「閻氏が、齊より至」(『周書』武帝本紀)った。この経緯は、宇文護伝に詳しい。

宇文護の母・閻姫と武帝の第四姑および諸親戚は、北齊に埋もれみな幽閉状態にあった。宇文護は宰相になってから、常にスパイを派遣して行方を捜していたが、消息を得られなかった。ここに至って、やっと帰還を許され、和好を取り交わすこととなった。(保定)四年に、まず武帝の姑が帰ってきた。北齊の君主は宇文護が既に最高権力を握っているとして、その母を留めておけば、後の紛争の火種になると考えたのだった。

(——しかし、母・閻姫の帰国は、実はすんなりとは行かなかった。一度この問題で書簡を往復したが)北齊側はすぐには帰還に応ぜず、更に宇文護に書簡を送り、重ねて宇文護の書を要望した。そして、再三書簡をやりとりしたが、やはり母を送り返してはこなかった。北周の朝議では、信頼関係を失するものだととして、役人に命じて書簡を北齊に送らせることとなった。(——その書簡文が以下に記録されているが、その内容は省略——)しかし、この書簡を送る前に、その母が帰ってきた。朝廷を挙げて慶祝しあい、天下に大赦した。

『周書』宇文護伝

北齊側が母親の帰還に簡単に応じなかった事情というのは、『北齊書』

を見ていくと、こう記されている。

周の宰相・宇文護の母、閻氏は、前より中山宮の方に留めおかれていた。宇文護は母・閻氏がなお生存しているとの情報を得て、辺境の方から書簡を送ってよこし、母の生還と善隣外交を申し出た。折しも、突厥が辺境をしばしば侵していたから、段詔軍は塞下にいた。そこで武成帝は黄門の徐世栄を遣わし、駅伝によってこの北周からの書簡を段詔に届けさせた。

段詔は、北周人の言行不一致、信義のなさは、今回の晋陽の役でも分かると思った。まして宇文護といえは、宰相を託されているとはいへ、実は国家の王たる身分である。母のために和を請うべく、ただの一介の使者ごときにそのようなことを説かせはすまい。これでもって、早速書簡を送り、母を送還いたしますなんてことをすれば、当方の弱腰姿勢を示すことになる。わしの愚見だが、表向きだけ承認したことにおいて、しばらく待つて後に釈放しても遅くはないだろう、そう考えた。

そういう訳で、これを聞き入れなかった。そこで、北周の使者を礼を尽くして返したのである。

〔周書〕段詔伝

北斉側の記録によれば、閻氏帰還交渉に当たった、宇文護のこの使者というのが、やや格のない者だったために、北斉側の不信感をかったようだ。結局、改めて「更に宇文護に書簡を送り、重ねて宇文護の書を要望し」、その真意を直接確かめることとしたのである。そして、実際に宇文護からの書簡が届くと、北斉はさらに「再三書簡をやりとり」する策をとった。これは、今次の交渉に際して、外交上できるだけ北周から

得点を稼ぎたい、との思惑によるものだろう。いわば、もったいぶって恩を売る形で、最大限北周の譲歩を引き出し、かつ彼らを怒らせない程度に止めながら決着をつける、というぎりぎりの外交を展開したことを物語っている。

この結果、宇文護は北斉に対し、しばらくは休戦することを暗に吞まされた格好となった。北斉側にしてみれば、朝廷内部の腐敗がひどかったから、北周・突厥連合軍とのたびたびの戦闘は、国運を危うくするとの危機感があつたようだ。この際、宇文護に北斉の恩義をかぶせ、その軍略にかせをはめたいとの狙いがあつたらう。もしこの信義に背けば、北周朝での最高実力者としての宇文護の威信にキズがつきかねない、かといって北斉の思惑に服してしまえば、北周内での彼への不満が吹き出しかねない。宇文護は、微妙な状況に立たされることとなる。

この北斉とのやりとりの間に届いた母からの書簡には、幼少時に別れて以来、母子が別々の所に暮らす悲しみ。今や八十歳の老母となつているのに、一緒に寝食をとるにできぬ辛さ。どんなに息子が榮養の極みにあろうとも、自身にはなんの恩典もないこと。今後は汝を頼りに生きてゆきたいこと、などが切々と綴られていて、書簡文としてなかなかの名文である。宇文護は「書を得て、悲しみに自ら勝えず、左右も能く仰視する莫し」〔周書〕宇文護伝) だったという。

宇文護は、政治的力量としては、「(政治の) 大体(＝全体のこと) において暗」かったが、「性は甚だ寛和」(以上『周書』宇文護伝) な所があつた。宇文護のそうした一面は、庾信の母への孝情ぶりに、彼がいたって感激したというエピソードにも表れている。

庾信は、母の逝去に会うや、杖によってやっと体を起こせるといった状況で、病にもかかり悲しみにたえぬといった様子だった。…晋

国公・宇文護は、太祖・宇文泰より後事を託され、世に賢明な補佐役とされたが、庾信のこれほどまでの孝情ぶりを見て、毎日憐れみつつ感嘆し、かつてそのことをある人に語った、「庾信という、あの南からきた羈旅の臣は、全く見上げた孝情ぶりだ、それがまことに天然の情から出ているのだ。葬送の式の時にも、手厚い礼をもって送り、ほとんど死ぬばかりじゃった。余も一度見て、ついには見るに忍びなかつたよ」と。

〔滕王道原序〕『庾子山集注〕

この庾信の母の逝去は、いつの頃か不明だが、この「原序」によれば、宇文護が北周朝の補弼役となって以降のことではある。また倪璠「庾信年譜」按には、

庾信は、母に仕えては孝行ということで世に聞こえた。母の逝去にあったのは、何年のことか詳しくは分からない。その孝情ぶりはわが身を傷つけんばかりで、かつて晋公・宇文護も感嘆したほどだった。ということからすると、晋公の誅される（建徳元年五七二）以前ということではある。

とある。

両者を総合すると、北周の初年（五五七）から建徳元（五七二）年の間という、あまりに漠然とした数字になってしまう。宇文護が庾信を「南人の羈臣」（原文）と称し、なおよそ者視していることからすると、これは、北周朝が旧梁臣を「羈臣」視する状況下での言い方ではないか、と推測される。すでに別稿で論じたように、北周が旧梁の顕貴らに対し、遅ればせながら優遇策に踏み切るのは保定二年のことで、この年以降、

旧梁臣の本格的な北周朝高官への登用が始まる。宇文護が、この「南からきた羈旅の臣」庾信に強い関心を寄せ、いろいろ執筆を命じたのは、まさにこの前後の頃である。「晋陽公の為に玉律・秤・尺・斗・升を進むる表」を書いたのが、保定元年五月。「大家辛晋国公が、石関の谷に撃るを命じ」たことで書かれた、「終南山の義谷銘 並びに序」が、保定二年七月である。このことからすると、保定二年あたりが、一つの境界線として引けるのではないかと思われる。ただし、これは「羈臣」という語感を頼りにしての、あとは状況証拠を細々と繋いだ上の推測である。確実な論のためには、庾信の母の墓碑銘が発見されることなどが必要ではある。

それはともかくも、庾信の母の死を伝える右の資料からは、庾信という人の孝情、また死者を悼む心の深さが窺える。これは庾信の人となりそのものだったといえよう。『梁朝の死』、また『その臣としての自己の死』を悼む哀歌——「哀江南賦」「擬詠懷詩」「擬連珠」の三部作——、それに「枯樹賦」等の作品においても、庾信は深い哀悼の辞を献じた心ある文人だった。庾信のこうした死者への弔礼の厚さ、またその哀悼の辞の重さは、北周人にも強い感銘を与えていったと思われる。やがて庾信は、北周の顕貴の依頼を受けて多数の墓碑銘を執筆するようになる。庾信ほど、人間の死を重い文学の命題として受けとめ、哀悼の辞を刻み続けた人物も珍しい。それは、野暮ったかった長安の帝都に、一つの荘重な儀礼文化を育むもとなつたと考えられる。後の唐人にとって、墓碑銘といえはこの庾信の文体を指していたという¹⁰。次の資料からもそれは窺えよう。

是に先んじて、文士ら碑頌を撰するに、皆徐庾（徐陵と庾信）を以て宗と為し、氣調漸く劣る。（富）嘉謨、（呉）少微と与に詞を

属るに、皆經典を以て本と為す。時の人、之を欣慕し、文体一変す。
 『旧唐書』卷一九〇 富嘉謨伝

庾信のこの墓碑銘については、また別に論ずることとし、小論では宇文護の動靜に眼目を置いておくことにしたい。

肉親の恩愛の情に対する、庾信のこの心のこもった細やかな儀礼に、自らも強く引かれた宇文護だったが、「災禍に遭遇し、(母の)膝下を遠離して、三十五年」(宇文護の書簡 『周書』同伝)ぶりという再会の喜びは、ほんの束の間にすぎなかつた。面倒な事態が、突然外から降つて湧いてきたのである。突厥が約束の期限に間に合せて、律儀にも軍勢を引き連れてやってきたのだ。宇文護としては、北斉が親を送還してきてくれたことへの恩義を強く感じていた折だったから、今は北斉討伐などという気には全然なれなかつた。しかし他方、約束通りに駆けつけた辺境の突厥に対しても、信頼を失しては彼らとの間にややこしい問題を引き起こしてしまうという危惧もあった。北斉への恩義と突厥への信義との狭間で思い悩んだ挙げ句に、周囲の雪辱戦の熱気に押し切られるような形で、やむなく東伐に赴くことを皇帝に願ひ出たのである。その結果については、別稿で論ずることとしたい。

おわりに

以上、小論では、これまで空白だった北周・突厥連合軍による第一次北斉討伐の詳しい実態を、史料を総合的に読解することで再現し、その上でこの戦いと関わる庾信の作品や事跡を取り上げた。この第一次北斉討伐は、結局北周側の惨敗という結果に終わった。北周をあげてのこの激しい戦闘を機に、北周の大家宰・都督中外諸軍事として絶大な権力を

もち、北周王朝に君臨してきた宇文護の権勢に少しずつ暗い影が、しかし確実に一歩ずつ忍び寄ってくるようになる。

『隋書』天文下には、保定四年三月、天文に異変があったと記す。これを『隋書』は、「兵起こすも將に死す^{きざし}応なり」と解している。この不吉な兆しとは、いったい何を意味していたのか。『隋書』は続けて、こう記す。

占ひ曰わく、「上相は誅され、車は馳しり人も走る。天下に兵起する」と。其年の十月、冢宰・宇文護は軍を率いて斉を討つ。十二月、柱国・庸公王雄、力戦するも之に死し、遂に師を班(＝撤退)す。

つまり、宇文護や庸公王雄の死を暗示するものだという。王雄の死は現実のものとなつたが、宇文護の方は敗戦の罪を許され、どうにか権力を保持することができた。

では、その後の宇文護の政治体制はどうなつてゆくのか。また次の第二次北斉討伐「洛陽の役」により、北周朝廷はどう変化してゆくのか。そして、このような新たな趨勢の下で、庾信はどのような波をかぶつてゆくのか。こうした問題は、すべて次稿の論として述べたく思う。

注

- (1) 国境戦での小競り合いなら、かなり以前からあつた。例えば、後の保定四年の「洛陽の役」で北斉軍に捕らわれる楊樹だが、「東境に鎮して二十余年、数しは齊人と戦い、毎常に克く獲つ」(『周書』卷34楊樹伝)と記されるように、断続的に国境紛争は起きていたと考えられる。ただ、朝廷の強い指示で北斉討伐がなされたのは、それまでなかったということである。
- (2) 庾信「駕に従いて講武を觀る」詩を参照。

- (3) 拙論「北周・武帝期の庾信」(二)、『愛媛大学教育学部紀要』29―2 (97)
- (4) 拙論「北周・武帝期の庾信」(一)、『愛媛大学教育学部紀要』29―1 (96)
- (5) 同第一章。
- (6) 薛宗正『突厥史』(中国社会科学出版社 92) 第三章「突厥汗国」などを参照。
- (7) この李賢墓の発掘報告については、右注(4) 拙論の注(3) を参照されたい。
- (8) 前掲「北周・武帝期の庾信」(二) 第一章。
- (9) 拙論「北周・明帝期の庾信」(上)、『愛媛大学教育学部紀要』28―1 (95) 第一章。
- (10) 庾信の墓碑銘が、当時唐朝の最も盛んな文体だったこと、及びそれが日本にも流入し、わが国の墓碑銘の中にも採られたことについては、近年、東野治之氏に『庾信集』と威奈大村墓誌』、『遣唐使と正倉院』岩波書店 (92) の論文がある。

(一九九七年四月三〇日受理)